

■ミッドナイト vs ヴィラン育成学園

プロヒーローの一人、《18禁ヒーロー》ミッドナイト。
彼女は今日も学園で女教師として役割を果たしつつ、
本業であるヒーロー業にて悪辣なヴィランと戦っていた！

「はいはい、またヴィランね。ふふ……かかってくるなさい♪」

新たなヴィランとの勝負に挑んだミッドナイト。しかし——

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♡♡

「ああっ♡♡ このっ♡♡ やめなさい、それ以上……ああああっ♡♡♡♡」

今回のヴィランは、今までのように甘くなかった——

その《個性》から、ヒーローとしての実力も高いはずのミッドナイト。
しかし相性が悪かったらしく、敗北し……しかもヴィランに犯され、
絶頂するという惨めな結果になってしまう。
更にヴィランは彼女の個性と身体能力を封じると、
自分たちのアジトに拉致するのだが……

「こ、これは……ヴィラン育成機関……?!」

なんと、そのアジトとはヒーロー科の学園のように、ヴィランを育成する学園であった。
ヴィラン学園……そこに拉致されたミッドナイトはそれ以降、
個性と身体能力を封じられたまま『ヴィラン育成学園』に勤務させられるのだった。

◆レイプ実習

『今日みなさんにはヴィランの基本、《レイプ》をミッドナイト先生との実習で学んでもらいます』

学内アナウンスを聞いて、クラス男子たちが一斉に声を上げる。
それもそのはず、ミッドナイトというスタイル抜群の女ヒーローをレイプできるのだ。
たとえ悪意のない者であろうと、男であれば興奮しないはずもない。

……ヴィラン学園は優秀なヒーローが

ヒーロー科から排出され続けることに着目してヴィラン組織に作られた施設。

そこでは個性の悪用方法、加害目的での犯罪学などを教育しており……

更に“よりヴィランらしい行為”として、性犯罪まで教えていた。

しかも実習と称し、本当にレイプまでさせる始末。

結束力がないヴィラン候補生をまとめるため、趣味と実益を兼ねた《授業》なのだが、

その《教材》かつ《対女性用科目特化型講師》として、

ミッドナイトは拉致という形でスカウトされたのだ。

(何てことなの……！ ヴィランに捕まっただけでなく、ヴィランを目指すような……
しかも格下のコに犯されるなんて……！)

凶悪すぎる企みに義憤と悔恨を抱きながら、教室に入る。

そこには三十人ほどの男子たちが座っており、

ヒーローコスチュームのままのミッドナイトを見て目をギラつかせていた。

まだあどけなさの残る子たちだが、

それゆえにミッドナイトという成熟した女性を前にして

可愛らしい顔も台無しになるほど軽薄な笑みを浮かべている。

それを彼らの精神的な青さを見抜いたミッドナイトは、彼らの餌食となることよりも、卑劣なヴィランの企みによって彼らの道を誤らせてしまうことに罪悪感さえ抱く。

(自信……付けさせちゃうわね……言ってる場合じゃないけど……)

彼らは身体、実年齢、そして精神が若すぎる。

ヴィラン予備軍と言っても、おそらく全員が童貞だろう。

彼らが女プロヒーロー、それも男性人気最上位のミッドナイトをレイプしたとなれば、男としてもヴィランとしても箔が付くというもの。

下手をすればこれが初の“犯行”となり、ヴィランデビューの第一歩となりかねない。

そんな初体験を味わってしまうえば、さぞ自信がついてしまうだろう。

『ではミッドナイト先生、あとは頼みますよ』

【せんせ、今日はよろしくねー♪】

今ミッドナイトにできることは、従ったフリをして学園の欠陥を探り、隙を見て反撃と脱出を試みること。

更に、可能であれば少年たちを更生もしくは無力化しながら……が理想的な動きだろう。

そんなことを考えていると、男子たちが次々に席を立てて詰め寄ってくる。

学園という場、授業中で教師と生徒、という体裁を取り繕っているためか、

いきなり襲いかかるようなことはしないようだが……
それでもミッドナイトが逃げられないように囲み、
一触即発の張り詰めた空気を成している。

【せんせー聞いてるー？】

【ねえミッドナイト先生、レイプってどうやるんですか？ 教えてくださいよー♪】

【初めての《授業》で緊張してる？

大丈夫だって、ボクらもほとんどが“はじめて”だからさー♪】

【ボクらを立派なヴィランにしてくださいよー♪】

「……あなたたち、レイプが何なのか……」

そもそも、ヴィランになるっていうことがどういうことか分かってるの？」

【でもさー】

「っ？ 何を……うっ?!」

少年の一人が手をかざす。すると妖しい光が薄ら放出され、その光に当たった途端、
ミッドナイトの身体が発熱する。

下腹部にしこりのように熱が溜まり、思わず身を揉んでしまう。

【お、効いてる効いてる♪】

「あなた、その個性……！」

【ボクの個性《発情》だよ♪】

まだまだ弱いけど、今のせんせーにはちょうど良く効くんだねー♪】

——ミッドナイトは捕らえられてから、個性が封印され、身体能力も低下させられた。
更に学園の中は常に催淫効果が働き、中にいる限り、
弱くではあるが性別年齢に関係なく常時発情するようになっている。
既に発生していた小さな疼きが男子の個性により引き上げられ、
性感への耐性に自信があるミッドナイトも動揺するほどになったのだ。

【こんな個性、犯罪にしか使えないしなー。もうボクはヴィランになるしかないよね】

「そんなことないわ、相手を選ばず使えるなら、

性のことで悩んでいる人の助けになる……」

その個性でも立派に人助けできるのよ！ それに、そもそも個性の濫用は」

【あっ、そーゆーのはいいんで】

がしっ！

「っ、離しなさい！ やめなさい、来ないで……ああっ！」

【《18禁ヒーロー》名乗っという常識人ヅラされてもなー♪】

説得を試みるが、催淫効果は男子たちにも働いている。
性欲旺盛な年頃の男子となればその効果も高く、
彼らは軽い催眠にかかっているようなものだ。
ただ言葉をかけるだけでは説得できず、また一歩近付いた男子たちがついに手を伸ばし、
数人がミッドナイトを床に押さえつける。

「こんなことして……後で必ず後悔するわよ！」

【ヤラない方が超後悔するに決まってるじゃん。せんせー自分の価値わかってないの？】

【あ、順番はもう決めてあるから。最初にボくら《性犯罪特化型》で発情させて、次に……】

抵抗を吟味しながら、彼らは考えたレイプ計画を聞かせてくる。
その内容は、最初に《発情》など、
性犯罪に特化できる個性でミッドナイトを強制的に興奮させ、
次いで巨根……ペニスのサイズに自信がある者たちが捻じ込む。
その後、遅漏の男子や余裕のある男子らがじっくり責めて、
出来上がったとこに残りが一気に……というものだ。

【どう、このレイププラン？ せんせーも気に入ると思うよ】

「自信満々などこ悪いけど不合格よ。」

相手のことを全く考えてない……男として、まだまだね」

【おお一流石ミッドナイトせんせー！ きびしー！】

【じゃあホントにまだまだなのか、ちゃんと教えてもらわないとね！】

皮肉を言っても、倫理観を放棄した軽薄な男子たちには通じない。
最初の一人目が嗜虐的に笑うとミッドナイトのコスチュームに手をかけ、
股間部を強引にズラす。
極薄タイツを引き裂くと、現役プロヒーローにして女教師の牝花卉が男子たちに晒される。

「っ！」

(見られる……こんな子たちに……っ！)

【おおっ！】

【これがミッドナイトのオマンコ……】

【イメージと違ってめっちゃキレイだね】

おそらく初めて見るであろう女性器を食い入るように眺め、観賞する。ミッドナイトは男性経験も豊富だが、量より質を重視するタイプ。手入れも欠かさず、天性の素質もあり、花卉は鮮やかで整ったままだ。性器にも関わらず美しさを放つそれに大勢が見惚れる中、最初の男子が指でなぞって具合を確認する。

むに……ぬちゅっ♥

「……っ」

【なんだ、ちゃんと濡れてるんだ。怒ってるように見えても身体は正直だねー♪】

得意げに言うが……確かにミッドナイトも催淫効果で発情しているものの、興奮度は彼らの方が圧倒的に上だ。もはや我慢できないと言った様子でチャックを下ろすと、張り詰めた肉幹を露出させる。

【まあもっと濡れて欲しかったけど、これから調教すればいいし……もういいよね、ハメるよ！】

「っっ！」

(こ……これがこの子の?! 何よ、この凶悪なのは……!)

【どうコレ? 入学した時に個性で強化されたんだけど。結構デカくない?】

「っ……お、大きければいいなんて、本気で思い込んでるの? やっぱりお子様ね!」

(まずいわね……大きさもだけど、形がエグすぎる……! まさか、全員こんな感じなの?)

少年が陰唇にこすり付けながら、体格に見合わぬ巨大な雄肉を自慢する。一般的に、女性が快感を得るのにサイズはあまり関係ない。むしろ大きいほど不快感さえ与えることもある。そのため少年の自慢は意味をなさないもの……としたいところだが、生憎ミッドナイトは豊富な経験と性への好奇心がたたり、巨根でも……否、巨根でなければ満足できない身体になっていた。少年のモノはまさにミッドナイトが理想とする長さとおさであり、加えて反り上がったカリ高の形は過去経験した最高のものすら上回っている。今までの経験にない形状を見せ付けられ、しかも相手の口ぶりからして他の男子たちも同様のモノを持っている可能性が高い。そう考えると、表情こそ怒りを示しているものの、ミッドナイトは《発情》個性を受けた時以上に興奮してしまう。

【あ、ホントにデカいんだ。みんなこんな感じだと思うから覚悟してね?】

「大口叩いて、恥かいても知らないわよ……使い方も、ろくに知らないクセに……!」

【だから今から教えてもらうんだって。このマンコでさ！】

「ふざけないでっ！ あっ……！」

どうせやるなら、せめてゴムをつけなさい！ そしたらいくらでも……」

【いやいや、まさかミッドナイトせんせーともあろう方が生ハメ拒否なんてないでしょ？】

【せんせーボク今日ゴム忘れたましたぁー】

【ボクもー】

予想通りではあるが、避妊の懇願はまるで意味をなさない。

秘肉に宛がい、いよいよ犯す……と思いきや、

ミッドナイトが抵抗して動き、少年自身も経験がなく、

かつ酷く焦っているというのもあり、なかなか巨根を挿入できない。

【レイプなんだから避妊なんかするわけないって♪ ほら、ハメるよっ！】

ぬちゅ♥ くちゅ……っ♥

「っ！ 何？ 本当に童貞なのね！ 挿れる孔も分かってないじゃない！」

【うるさいなあ、教材のクセにっ！ この……っ！】

やはり彼らの精力や個性は上っ面だけのものなのだ。

それを知って安堵すると、ミッドナイトはあえて自分から陰唇を押し付けることで挿入を妨害し、同時に興奮しきったペニスを持ち前のテクニックで刺激する。

ミッドナイトほどの経験と技術があれば、

股間を押し付けるだけでも短時間で男を射精させることができる。

元々旺盛な性欲も昂ぶらされ、逆に犯す勢いで相手を素股責めしていく。

顔だけは可愛らしい少年が苦悶し、それに嗜虐的な快感を覚えるミッドナイトだが……

少年がついに牝孔を見つけ、そこに若い精力を力任せに叩き付けた。

(こうなったらヤケよ！ この子たちがこれ以上道を踏み外さないようにするためにも、女の怖さを教えてあげるわっ！)

「ほらほら、早くしないと暴発しちゃうわよ？」

素股でイッちやいなさいっ！」

ずりゅっ♥ ずりゅんっ♥

【う、あっ！ このビッチめ……大人しくハメられろっ！】

ぐちゅっ♥

(あ、ヤバ……)

ずぶうんっ♥♥

「ああああ……っ！！」

一度正しい場所を狙われれば、湿った肉壺は巨根をすんなりと受け入れてしまい、一気に奥まで突き挿さった。
若さに任せた挿入であろうと理想の形状が襞を引っ掻き、肉壁を押し広げて強い快感を与えてくる。
絶頂こそしないものの、その快感はなかなかのものであり、ミッドナイトは痛みではなく愉悦によって大きな声を上げさせられる。
下の唇も反射的に戦慄き……その際の締め付けにより、少年は極上美女の中であっさりと果ててしまう。

【あ……………っっ！！】

ドプッ♥♥ ビュルルルルルッ♥♥

「っっ！？ ……っ！ ふう……………っ！」

(ああ、中に……！ 遠慮なく出してくれちゃって……

しかも、なに……これ……？ 精液……熱い……?)

一番槍というのもあり相当な興奮で挿入した直後に達したものの、巨根から飛び出た精液は大量で、結合部から逆流してくるほど。その精液量も驚くべきものだが……それ以上に、膣内射精された際の勢いと熱を、薄らとだが感じていることに驚愕を隠せない。

(ウソよ……こんなの、エロ本だけでしょ……?!)

【あー、すぐ出ちゃったよ！ ……でも、やっぱ本物のマンコは違うね。最高に気持ち良かったよ、せんせー！】

そんなミッドナイトの心境などお構いなしに、少年は自分本位な快樂を得て感想を述べる。他の男子たちも個性を発動させ、ミッドナイトの状態を確認していく。

【けっこう出たと思うんだけど……どう？ 中に入ってる？ 一発で孕んだんじゃない？】

【待って、《透視》で見てみる……おー、がっつり入ってる。

……でもコレ……精液以外になんか入ってる？】

男子の一人が個性を使い、膣道や子宮の様子を見る。中に精液を溜まっているのを見て支配欲を満たしているが、その時、精液以外の異物に気付いた。

【これ……避妊リングってヤツ？】

【え、何それ？】

【子宮に入れる避妊具だっけ？】

なんだミッドナイトせんせー、ゴム付けたとか言っというてこんなもん着けてたの?!】

【検索したら避妊率99.5%とか出ただけど】

【えー、こんなの使ってるなんて聞いてないよ】

【誰か避妊リング何とか外せない?】

ミッドナイトの子宮の中に挿入されていたものは避妊リング。

子宮内に装着し、妊娠を防ぐ女性用の避妊具だ。

それを着用していると知り、男子たちはざわついていく。

避妊リングはコンドーム以上の高い避妊率であり、

子宮内にあるため人力で取り外すのは不可能。

体内の物体を取り出せる個性持ちもいないらしく、一旦は動揺を見せるが……

妊娠させられない不満すら興奮が押し流し、輪姦陵辱を再開させる。

【外すのムリかあ……ま、妊娠確率0.1%もあれば充分でしょ。

どーせ個性使わないフツのセックスの話だよな?】

【こんだけ性犯罪特化型が揃ってるんだから、ハメまくってたらその内孕むって】

【それに、こんなもの着けてるってことは、セックスしまくりたいってことだよな?

やっぱりヴィランにレイプされるの期待してたんでしょ?】

「暴発しといて、良く言うわね……

そうね、満足できるようなセックスなら、歓迎できたんだけど……」

楽観的に考え、自分たちなら何とかなると自信を取り戻す。

彼らの軽薄な言葉に、ミッドナイトも黙っていられず言い返す。

「三こすり半もできない、あんな早漏くんじゃ、ね……♪」

【……へえ……なら、せんせーのマンコで鍛えてもらおうしかないね!】

合図し、二人目と交代する。新たな少年がすぐにミッドナイトに覆い被さると、一人目と同じ理想形の巨根を押し付ける。

【確かに、ちょっとナメてたかもね。なら、こっちは本気でいくよ……!】

ずぶ……っ♥

「っ! は……っ! ふ……っ!

あら……今度は弱々しいわね……イクのが、怖いのかしら……っ!」

【ああ……ホントだ、このオマンコやばいっ……!】

ま、焦らないでよせんせー。お望み通り、じっくり味わうからさ……っ!】

一人目の暴発から学んだつもりか、今度は打って変わってゆっくりとした挿入。ゆえに刺

激は小さいが、焦らない緩慢な動きが確実に牝肉を疼かせる。

【オマンコだけじゃ、せんせー、満足できないし、もったいないよね……
ってことで、おっばい、失礼しまーす……っ】

少年は挿入したまま動かさずに秘肉の感触を味わう。
それだけで呼吸を乱しながらも快楽を享受すると、次に胸へと手を伸ばした。
ヒーローコスチュームにより強調され、際立って目立つミッドナイトの胸。
顔ほどの大きさを持ちながら重力に逆らわない形を保つ夢のような巨乳を指先で確かめるように触れ、ゆっくりと埋めていくと、少年の嘆息と共に中でヒクンと巨根が震える。

【やばっ……オマンコだけじゃないね、
流石ミッドナイトせんせー……おっばい揉んだだけで出そ……！】
【そんなスゴいの？ プリン？ マシュマロ？ モチ？ 低反発まくら？】
【……全部……かな……】
【え？ 全部乗せ？】
【流石は元雄英教師、おっばいも最高峰なんだね！】

拙い指使いながらも感触を吟味し、
触れただけで射精必至の心地よさの少年の方が顔を呆けさせる。
それもそのはず、ミッドナイトの胸は柔らかさと適度な弾力に
ハリとなめらかな感触まで兼ね備える、きめ細やかな美巨乳。
男の理想を詰め込んだ柔肉に触覚で優れる手で触れ、
強気に指を弾きつつ揉まれるたびにぷるぷると歪む低反発の質感を見れば、
レイプするはずの性犯罪者でさえたちまち虜にされてしまうのだ。
少年はあまりの心地よさに暴発してしまわないよう巨根を力ませ、
決して前後運動はせずに胸の感触のみを愉しんでいく。

「退屈ねえ……胸を触るだけでは満足できないわよ？ 坊やはもう限界なのかしら？」

【焦っちゃ、ダメだって……！
それとも、割と感じてるのを、ごまかしたいの、かな……っ！】

恥部に触り、犯すのも一人ずつ。青い童貞らしさの残るお行儀の良さ。
それが幸いして、輪姦だというのに個性以外の責めはまだ大人しいが……

(童貞らしく、がっついてくるかと思ったけど……
じっくりされた方がまずいわね……一気にされても嫌だけど……！)

肉体的苦痛は小さいものの、性的快感は少しずつ蓄積されていく。
皮肉にも、ミッドナイトは焦らすような責めに弱かった。
大抵の男はミッドナイトという極上の美女を前にして暴走してしまうため、
緩やかな責めは比較的経験が浅いのだ。
現時点程度の発情ならば、精神や性的にはまだまだ余裕がある。
ならば彼らを一気に消耗させた方が望ましいのだが……
二人目にしてこのようにじっくり仕込まれたら。催淫系の個性まで使われれば。
いずれ精神的にも精力的にも完全に劣勢になるかもしれない。
ゆえに挑発するが、ヴィラン男子はレイプの最中だというのに頭だけは冷静だ。
となれば、やはりこちらから責めるしかない。
他の男子に脚を押さえつけられ、今は腰を使って少年を責められない。
だが膣肉を締めることはでき、きつく狭め、時には広げて緩急を付けた不規則な収斂をすれば、少年は更に呼吸を乱して表情を苦しくさせる。

「あたしが感じてる？ ちゃんと現実を見なきゃダメよ♪

ヴィランおちんぼ、もう限界でしょう……？

ほら、先生のおまんこでどぴゅどぴゅしちゃいなさいっ！」

ぬちゅっ♥ ぎちゅうっ♥

【何、これっ！ おまんこっ、別の生き物みたいにつ！ あ！ う……っつ！】

ビュルウツ♥♥ ドプププ……ツ♥♥

「っあ！ ……ふっ……！ ふうっ……はい、二人目終わり♪

可愛い声が出たわね、よしよし♪ でも、これじゃ合格点はあげられないわね。

満足させたいならヴィランらしく、もっと激しいの来なさい♪」

甘やかすような言葉と嗜虐欲への煽りを織り交ぜての挑発。

これで彼らが典型的な感情任せのレイプに走ってくれればいいのだが……

【ふう——気持ち良かった……！

みんな焦っちゃダメだよ、最初だけはじっくり仕込まないとね……♪】

少年は巨根を搾られ、腰砕けで汗まみれとなりながらも残る男子たちを宥める。

ただ性欲を発散するだけでなく、女を、ミッドナイトを墮とす……男にとっては充分すぎる大義に、逸る気持ちを抑えての徹底した快樂調教レイプが続いていく……

◆
【《サーチ》で見たけど、少しずつ感じて来てるよ。多分、熱と同時責めが効いてる】
【まだまだ《熱》は出せるからね。エリートみたいに爆発とか炎は出せないけど、
じんわりあっためるのなら得意だから……せんせーのオマンコもあっため直すねー♪】

「は……っ♥！ そんなの……意味、ないわよ……♥
セックスは、個性なんて小細工使わないのが、一番……」

【っ、出るっ！】

ドプッ♥♥

「っっ…………♥♥ は……あっ♥♥」

(熱、い……♥ 何なのよこの感覚っ♥ ダメ、そろそろ声、我慢できない……っ♥)

十五人目……およそ男子たちの半分が犯し終える頃。
ミッドナイトの様子は小さくも明確に変化していた。
男子たちはそれぞれが個性を使い、連携してミッドナイトを発情させ、
自分たちを強化する。

《熱》で肉壺と巨根の温度を僅かに上げ、《敏感化》でこれまた僅かに
肉壺や子宮の感覚を鋭敏にして、膣内射精の熱で感じるようにする。

《サーチ》も見れば分かる程度の情報しか得られないが、
個性で確認することで少年たちの自信を裏付け、確実に丁寧に女体を追い詰める。
一つ一つは弱い、格下ヴィランらしいレベル。

だが組み合わせることで局所的に責め続けることで、少しずつ効果を発揮していく。
ミッドナイトの恐れる通りにことが運び、今では明確に性悦を感じさせられている。
皮肉を言う余裕も次第になくなり、次にできる抵抗は“声を抑える”ことだが……
膣内射精されれば、熱い逆りを感じて自然と艶めかしい音が込み上げてしまう。

【じゃーそろそろ《絶倫》いきまーす♪】

中盤戦となり、我慢強さに自信のある者が投入される。
個性の名も直球の《絶倫》を持つ男子が、熱く滾るものを押し込んでくる。

【気持ち良かったら声出していいからねー♪】

「……ふふっ……それは愉しみ、ね……♥」
(《絶倫》なんて個性……童貞がろくに使えるはずないわ♥
こんなお子様相手にこれ以上声なんて出すわけ……)

ずぶんっ♥

「っはあっっ♥♥」

胸中で誓いを立てた直後、極太挿入に牝の音を吐かされる。
絶頂こそ堪えられるものの、もはや彼らの注挿は
ミッドナイトにとって立派な責めになっていた。
陰核の裏と奥深くのポルチオ。長いピストンでこれらを交互に刺激し、
一定の速度で肉壺を責める。
同時に胸を掴み、スーツの上からも形が浮き出るほど硬くなった乳首を弄んで
上下の恥部を同じタイミングで責めていく。

【やっぱ気持ち良いんだね！ 遠慮せず喘ぎまくっていいのに♪】

ぱんっ……ぱんっ♥ にぢゅっ♥ くり……っ♥

「ふっ……♥ うっ、あ♥ い、痛い、だけ、よっ♥ っお♥ ……っ♥」

(こいつ……個性、しっかり使えてる♥ その若さでどんだけオナニーしてきたのよっ♥)

ミッドナイトが仕上がってきたのもあり、
今度の絶倫少年には他の男子よりも一際強く感じてしまう。
個性を鍛えるのは困難なのだが、ミッドナイトに通用するほどのレベルとなると、
さぞ自慰か何かで鍛えたのだろう。
そんな雑念で現実逃避させるほど少年の巨根は官能に響き、
甘えた声を断続的に出させられる。
そして比較的長い注挿の後、巨根がビクンと強く跳ねる。

【う……っ！】

(だ、出される……っ♥ 我慢……しないと……っ♥)

ピュルルッ♥♥ ピュピュウウッ♥♥

「っはっ♥♥ あ♥♥ あ♥♥ っぐう……っっ♥♥」

(っっ?!♥♥ 射精……弱……っ♥♥ そ、そうよ……この程度の快樂なんてっ♥♥)

精力に反して若干威力の低い熱を受け、
弱々しい声が溢れさせながらも心の中で強がるミッドナイト。
威力が低いのは、自分の性感耐性が本領を發揮したから……
そう思っていると、少年がまだ余裕を残したまま一気に引き抜く。

ぬぶんっ♥

「っお♥♥」

【ふー……ちょっと休憩していい？ 我慢汁が射精みたいに出ちゃったよ】

「な……あれ、我慢汁……？♥♥」

(そんな……この子、まだイッてないの……？♥♥)

どうやら先走った愛液が射精のように飛び出ただけのようで、
そのために威力が弱かったのだ。

無論、それだけの愛液が出るということは彼もかなり追い詰められている証拠だが、彼は
プライドか理性か、一旦引き抜いて休憩することを選んだ。

力強く熱い射精を心のどこかで待っていたミッドナイトは彼の選択により
焦らされているような気分になり、自らの欲求で子宮の熱を高めてしまう。

(何よ……中出し、おあずけのつもり？♥ そっちこそ我慢してないで、さっさとイキなさ)

【じゃー今の内に溜まった精液を掻き出しとこっか】

ぐちゅうっ♥♥

「っっ♥♥」

【お、手マンでも感じてる？】

と、そこで巨根ではなく指が挿入され、中の白濁をゆっくりと掻き出していく。

全く質の違う刺激が来て思わず声が出そうになるのを堪えるが、

膣が締まっては感じているのが簡単にバレてしまう。

膣内掃除も兼ねた手マンが効いていると知るや、

少年たちは自慢の巨根ではなく指で乳首、膣内、そして陰核に触れてくる。

【ホントは順序逆だけど、せんせーにはこれくらいでちょうどいいかもね】

【チンポでだいぶ慣らしたからね。お、クリで感じてる？】

【今は同時責めが一番効くっぼいね。あと焦らしかな？】

「んっ、くうっ♥♥ そんな眠たいことっ♥ 効いてないって、言っっ♥

あ♥♥ クリっ♥♥」

今まで直接触れられなかった陰核を摘ままれ、

思わず声を上げて制止したくなるほど昂ぶってしまう。

それぞれが一つずつ責められるならばともかく、

同時に刺激されれば否応なく身体が反応し、陰核がぷくっとして硬く大きくなる。

長く責められ、かと思えば膣内射精おあずけで昂ぶった子宮は、異常なまでの経験と貪欲さを持つがゆえに“最初の絶頂”に酷く餓えており、内側の発熱を外側にも発露させ、牝勃起の感度が異様に高め……

(あ、これダメ♥♥ クリっ♥♥ スイッチ入ってる♥♥
ウソでしょっ♥♥ ヴィラン志望の子の手マンなんかにつっ♥♥)
【あれ、もしかしてイクんじゃない？ せんせークリイキ派だった？】
にちゅっ♥ じゅぶ♥ くちゅうっ♥♥
「ふっ♥♥ つっは♥♥ 誰がっ♥♥ イカないっ♥♥
そんな♥♥ 撫でるだけで♥♥ んんっつう♥♥ イツたりなんかっ♥♥」
【めっちゃ効いてる！ 最初はチンポで中イキさせたかったけど……
しょうがない、まずは一回イカせるよ！】
「ちよっ♥♥ 聞きなさい♥♥ クリなんかで満足っ♥♥
できっ♥♥ なっ♥♥ あ♥♥ あっああっ♥♥」

あからさまな狼狽に、少年たちの手が加速する。
高速で、それでいて柔らかく、触れるか触れないかの指使い。
焦らずにじっくり追い詰め……ミッドナイトの声が切羽詰まった途端、
乳首、陰核とその裏、四カ所が同時に強く圧迫される。

ぬちゅっ♥ くりっ♥ すりすりすりすり……っ♥
「なんなのよあんたたちっ♥♥ ちんぽっ♥♥
ちんぽでイカせるんじゃないかっ♥♥ あ♥♥ ああっ♥♥
ダメ……………っっひいっ♥♥」
くりっ♥♥ ぎゅむううっ♥♥
「っっあ♥♥♥ ダメ♥♥♥ う♥♥♥
あ……………っっっぐ♥♥♥♥」

悶える声と共に、押さえていた身体がビクンッ♥ と強く跳ね上がる。
今までとは全く異なる快樂反応に、男子たちは確信する。

【……イッた！ 今イッたよね！】
「ち♥♥ 違うわよ♥♥ 今のは……っ♥♥」